福岡税務署から西方向（福岡市博物館所蔵）

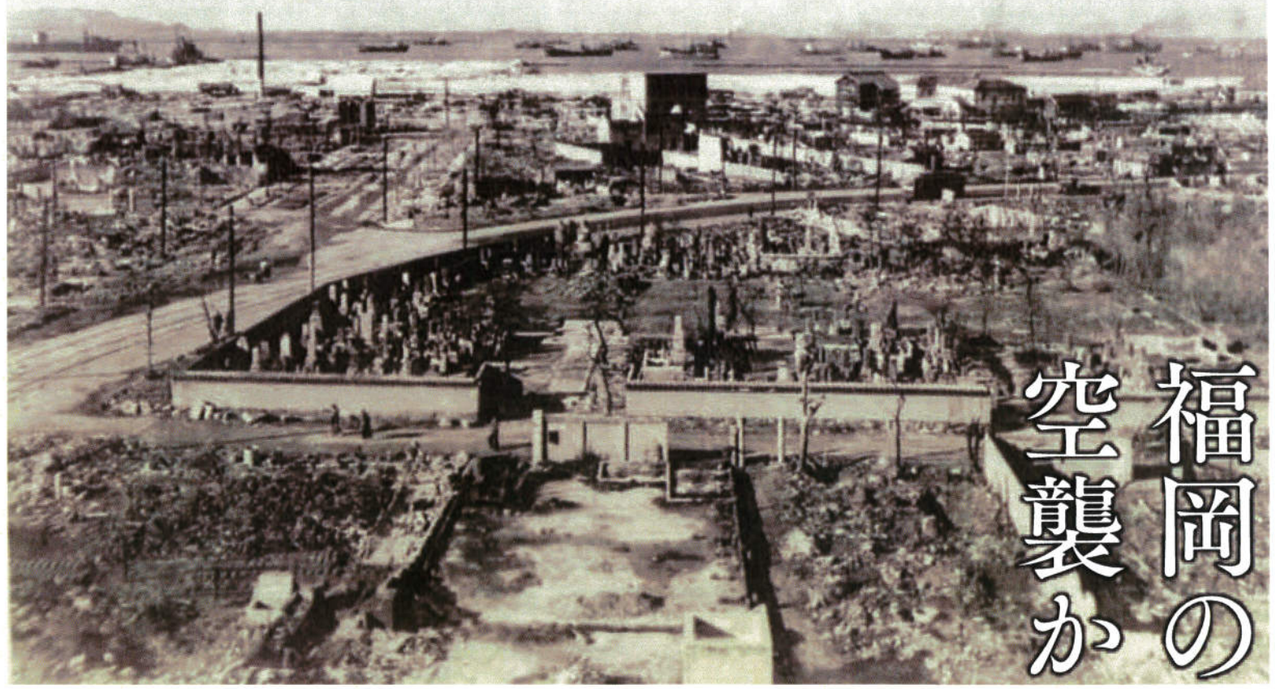
終戦特集

70年前の街の記憶を訪ねて。

終戦から70年。
戦争を体験した人が年々少なくなっているいま、
ふたたび平和の尊さが問われる時代となった。
福岡と広島、戦争を経験した
ふたつの街の記憶を訪ねることで、
戦争とは平和とは何かを改めて考えてみたい。

福岡の街に刻まれた空襲から戦後復興の記憶

我が街・福岡も、全国の大都市と同様に昭和20年に無差別な空襲により甚大な被害を受ける。空襲から戦後復興までの街の記憶を辿る。



天神から博多港方面／現在の天神4丁目あたりの風景。旧松屋百貨店（現・ミーナ天神）から博多港の方向を撮影している。（福岡市博物館所蔵）

自分たちの街が消えた福岡大空襲

6月19日。山笠を間近に控えた博多の街は、戦時とはいえ山を楽しみにする人々の熱気で久しぶりの賑わいをみせていた。梅雨の合間の晴れ間、久しぶりに星空が綺麗に見えたその夜、午後10時35分に警戒警報が発令される。同55分、それはけたたましいサイレン音を発する空襲警報へと変わった。ボーイングB29爆撃機が福岡南部の背振山を越え福岡の街に来襲してきたのだ。街の上空へさしかかった午後11時11分、ついに焼夷弾投下が始まる。

闇を切り裂く火を噴きながら、雨のように落ちる無数の焼夷弾。木造の家屋が多い街はあっと言う間に火の海となる。防空壕へ、川へ…逃げ惑う人々の上にも焼夷弾は容赦なく降り注ぐ。親を呼ぶ声、子供を探す声、建物が燃える音、倒壊する音、燃え上がる炎の柱で灼熱の通り。そのとき、福岡は文字通り地獄へと化してしまっていた。一夜明けた6月20日の朝、日が昇るとともにあらわになったその景色を当時の人々はどんな想いで見たのだろうか。

あれから70年経ち、空襲の傷跡を見ることは少ない。しかし、焼け野原と化した福岡・博多の街の戦後復興計画として新設・拡幅工事をされた昭和通り、大博通り、渡辺通りは、今も人々の生活を支えている。繁栄した福岡の街で暮らす今だからこそ、70年前に何があったのかは忘れてはならない。

現在の渡辺通り。天神のメインストリートとして活気溢れている（提供：福岡市）

終戦――。国内最大の引揚港としての役割

3,500人の引揚者を乗せ、博多に入稿する江の島丸。
この船は撮影の翌年、上海からの引揚者を乗せて帰国中に沈没した。

終戦を迎えると、博多は大きな役割を果たすこととなる。終戦直後に博多港は「引揚援護港」として指定を受け、旧満州をはじめ、朝鮮半島や台湾などに渡っていた人々の受け入れを行うこととなる。その数、一般国民約97万人、軍人・軍属約42万人の合計139万人。

特に旧満州や朝鮮半島北部からの引揚は、ソ連軍侵攻のため帰国の道中は困難を極めた。命からがら逃げ延びたその眼に、ようやく見えた日本の景色、博多の景色はどのように見えたのだろうか。

博多港へ降り立った人々の中には、病人や両親と死に別れた孤児、心と体に傷を負った女性たちの姿もあった。病人は博多引揚援護局が博多区の聖福寺に設置した「聖福病院」に、孤児たちは孤児収容施設「聖福寮」に保護。女性たちは「二日市保養所」で治療を受けた。福岡は傷ついた人々を癒し、日本での生活の第一歩を歩む支援をしていた街でもあったのだ。

平成8年。博多港に、豊福知徳氏作「博多港引揚記念碑（那の津往還）」のモニュメントが建てられた。そこには当時の福岡市長による、悲惨な体験を二度と繰り返さないこと、そして永久の平和を願う碑文が刻まれている。

博多港引揚記念碑には、博多港が引揚の港として果たした役割を忘れないようにとの想いも込められている。

帰国し安堵する家族。手に持つ白い包みは遺骨か。

満州からの引揚者たちの中には親と生き別れになった子供も多かった。

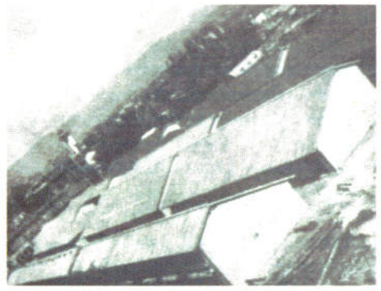
◎協力・写真提供／引揚港・博多を考える集い、福岡市

戦後復興のシンボル、新天町の誕生

昭和20年秋、戦争が終わったとはいえ依然福岡の街は空襲の爪痕が大きく残ったままであった。〝商人の町・博多〟の見る影もなく、街は闇市が横行する無法地帯と化している有様。そんなとき、福岡市民に希望の光を見せたのが新天町の誕生だ。

きっかけは西日本新聞社による郷土再建活動案。同社の再建案のひとつとして、当時の新聞社別館（現・住友生命ビル）の裏手に広がる焼け跡に「西日本中央市場」を建てようとする計画があがった。創立準備委員として白羽の矢が立てられたのは空襲で店を焼かれた老舗商店の店主たち。構想は西日本新聞紙上にも発表され、広く参加店が募集された。新しい商店街のためには出来る限り一流店を集めなければならないと、遠い疎開先まで勧誘に赴く委員もあったという。かくして、翌10月15日、晴れて落成創業式が執り行われ82店舗が開店した。

新天町の開業は多くの人々に復興の喜びと希望をもたらし、それから69年経つ今も市民に愛され続けている。



完成直後の新天町。完成まで待ちきれず水道や電気が通る前に引っ越してくる店主もいたそう。

今や新天町は天神のシンボル的存在だ。

◎協力・写真提供／新天町商店街商業協同組合

70年目の広島の旅

いま知りたい。あの日の広島と、強く立ち上がった広島の姿を。

人類史上初めて原子爆弾を投下された街、広島。「70年間は草木も生えない」。そう言われた街は、70年目を迎えたいま見事に復興を遂げた姿を見せてくれている。広島を旅することであらためて戦争と平和について考えたい。

原爆ドームを背景に、広島市内を走る被爆電車。
ボランティアガイドとともに被爆電車で広島をめぐるツアーも。（詳細は左ページ下で）

昭和のレトロな雰囲気をそのまま残す被爆電車。電車の骨組みや台車は今も当時のままだ。

原爆投下から3日で走った、市民を勇気づけた電車

「広電」「市電」と呼ばれ、広島市民から親しまれている電車がある。大正元年に運行を開始した広島電鉄（路面電車）だ。

昭和20年8月6日、その日の朝のラッシュ時間もいつも通り多くの人を乗せ70両の電車が市内を走っていた。8時15分。その瞬間は訪れた。辺りが真っ白になる程の強烈な光、そして凄まじい轟音…。広島は一瞬にして焦土と化す。

広島電鉄も大きな被害を受け、社員185名がその日のうちに亡くなり、260余名が重軽傷を負う。車両も108台が被爆し、電車に電気を送るための支柱の多くが倒壊。まさに壊滅的という状態であった。

しかし、翌日より夜通しの復旧作業が行われる。当時の様子を広島電鉄電車企画課係長の山広昭善さんは「公共交通機関として、なんとしても復旧しなければいけないという使命感だったのではないかと思います」と話す。かくして3日後の8月9日、一部区間で電車は動き出す。電車は痛み窓がない状態であったが、その様子を見た市民は「一番電車が走った！」と歓喜の声を上げ、大いに勇気づけられたと語り継がれている。

被爆した電車のうち2台は、70年を経た現在も現役で主に朝のラッシュ時に街を駆け抜けている。

被爆後の街を走る広電。（撮影者：川本俊雄、提供者：川本祥雄）

旧日本銀行広島支店。今も当時のまま残る。

旧日銀地下金庫の蝶番はエレベーターホールを抜けてきた爆風により破損している。

当時の日銀1階。ここを他銀行が間借りをし、市民に対応した。

旧帝國銀行広島支店（現広島アンデルセン）。広島の象徴として原爆ドームとどちらを残すか議論になったことも。

現在の福屋百貨店。戦時は軍施設として使用されていたため、敵機に見つかりにくいよう外壁を黒く塗られていた。

市内に残る被爆建物が伝えるあの日の物語

旧日本銀行広島支店は、爆心地から380メートルという近距離に位置していながら、〝日銀支店〟という役割から非常に堅牢に造られていたため倒壊を免れている。原爆投下の瞬間、3階建てのうち3階部分は窓を開けていたため全焼。そして1、2階、地下1階は大きな内部損傷はなかったものの、爆風によって吹き飛ばされたガラス戸、シャッター、窓枠などで中にいた多くの人々を傷つけた。

当時の支店長も、2階の支店長室から1階にまで飛ばされ重傷を負うが、病床から指示を出し8月8日には銀行としての業務を再開する。その日は、被災した市内中の銀行10行余りが日銀1階に間借りをし、市民に対応。当然、通帳や印鑑などを用意できない人が多くいたが、被災した市民を救済するため面通しだけでも支払いに応じていたという。ある金融機関がその後調査したところ、二重に支払ったり騙し取られた例は1件もなかったそうだ。原爆投下という未曽有の事態であっても、人々が誇りを忘れずに強い心を持っていたということの表れではないだろうか。現在、旧日銀支店は芸術文化活動の会場として市民に開放されているほか、近くには被爆しながら現在も営業を続けている福屋百貨店、旧帝國銀行広島支店（現在はベーカリーショップとなっている）も残っている。

そこにあるからこそ感じる平和の大切さ

あまりに有名な原爆ドームは、実は昭和40年代に保存か取り壊しかという議論が巻き起こったことがある。原爆による破壊で不安定な状態であったことに加え、風雨による劣化が進み倒壊の恐れがあったためだ。しかし、子供たちから上がった「未来のために原爆ドームを残してほしい」という声に当時の市長は心を動かされ保存を決定。国内外から寄付金が集まり大規模な補修工事が実施され、現在では世界文化遺産にも登録されている。

あの日から70年。今や日本だけでなく、海外から訪れた人々も食い入るように見つめる原爆ドーム。その前に立つと戦争がどれだけ恐ろしいものであるのか、そして今こうして暮らしていられる平和のありがたさを感じずにはいられない。

原爆ドームとして知られる『広島県産業奨励館』は、爆風と熱線のために一瞬で大破し、天井から火を噴いて全焼。爆風がほとんど垂直に働いたため、奇跡的に残骸が残ったが中にいた人たちは皆即死だった。（被爆前の原爆ドーム写真提供：広島平和記念資料館）

戦争と平和を知る「広島めぐりの旅」へ出掛けよう

今昔をたどるまち歩きガイド

観光ボランティアガイドが、被爆前と現在の広島市街地を比較するマップを用いて広島の今昔をたどるまち歩き。爆心地や原爆ドームなどを巡り、原爆の惨禍を経験し、乗り越えた平和都市「広島」の今を体感できる。

◆日程：～9月の毎週日曜
◆時間：11時～（所要時間約2時間半）
◆集合場所：JR広島駅南口の広島電鉄広島駅5番線のりば付近
◆料金：500円（中学生以上）
※路面電車運賃160円は別途参加者負担
※事前申込、各日先着30名限定
◆見学ルート：福屋八丁堀本店→本通り→広島アンデルセン（旧帝国銀行広島支店）→旧日本銀行広島支店→爆心地→原爆ドーム→元安橋→レストハウス（元大正屋呉服店）
◆お問合せ：広島市観光ボランティアガイド協会
☎082・247・6739（平日10:00～16:00）

被爆電車と武家茶道「上田宗箇流」の体験

広島駅～広電本社前まで被爆した電車に乗る体験ツアー。観光ボランティアガイドが車窓から見える被爆建物などを紹介してくれる。その後、広島電鉄本社内で、400年以上の歴史を持つ広島の武家茶道「上田宗箇流」の御点前を上田宗箇上屋敷を再現した茶室でいただく。

◆日程：9月5日（土）、19日（土）、10月3日（土）、17日（土）、11月7日（土）、14日（土）
◆時間：13時30分～（所要時間約2時間）
◆集合場所：JR広島駅南口の広島電鉄広島駅5番線のりば付近
◆料金：大人1,000円／小学生以下500円
※事前申込、各日先着30名限定
◆お問合せ：広島電鉄（株）電車企画課
☎082・242・3551（平日9:00～17:45）

提供／広島市経済観光局観光政策部